汲古選書 3

魯迅研究の現在

魯迅論集編集委員会

汲古選書 3

魯迅研究の現在

魯迅論集編集委員会

汲古選書3

魯迅研究の現在

一九九二年九月　発行

編　者　魯迅論集編集委員会
発行者　坂本健彦
印刷所　中台整版

発行所　汲古書院
〒101　東京都千代田区飯田橋二―五―四
電　話（三二六五）九七六四
FAX（三二二二）一八四五

©一九九二

ISBN4-7629-5003-3 C3398

目次

一　いかに読むか

独逸語専修学校に学んだ魯迅　北岡　正子　5

「難見真的人！」再考——「狂人日記」第十二節末尾の読解　丸尾　常喜　45

魯迅の「多疑」思惟様式についての試論　尾崎　文昭　73

魯迅の小説における対話性と世界像
——『故事新編』へ至る作品群に関する非「実証的」考察　代田　智明　95

二　いかに読まれたか

魯迅——艾蕪・沙汀
——〈関於小説題材的通信〉に関する一考察　杉本　雅子　125

〈モダン〉と〈ポスト・モダン〉の狭間
——中国の文学理論研究における〝掙扎〟と劉再復——　宇野木　洋　153
中国語教室の魯迅
——大正、昭和戦前期における中国語教育と近代中国文学の受容　藤井　省三　177

三　文学とは何か

魯迅とトロツキー　その一断面——樊仲雲訳『文学と革命』を中心に——　長堀　祐造　203
魯迅・馮雪峰のマルクス主義文芸論受容(一)
——水沫版・光華版「科学的芸術論叢書」の書誌的考察——　芦田　肇　235
魯迅・茅盾・胡風——文学遺産の継承をめぐって　白水　紀子　287
あとがき　近藤　龍哉　317

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

魯迅研究の現在

一　いかに読むか

独逸語専修学校に学んだ魯迅

北岡正子

はじめに

日本留学二年の後、仙台医学専門学校に学んだ周樹人、のちの魯迅は、学業半ばにして退学し東京へ戻った。「愚弱な国民」を頑健にするだけの医学は「緊要事ではない」、「彼らの精神を変えるのに有益なのは」「文芸」だと考えたのである。[1]その留学期後半、一九〇六年三月初頃から一九〇九年八月帰国するまで、彼は「文芸運動」の提唱に傾注した。これは、彼が選んだ留学生活の帰結であり、又、後年の文学者魯迅誕生の起点でもあった。この時彼が意図した「文芸運動」の内容・主張、或いはこまごまとした日常の生活については、彼自身が書いた文章・翻訳、一緒に暮し共に「文芸運動」を推進しようとした弟周作人の回想等によって、具さに知ることが出来る。だが、この期間魯迅が留学生としての身分を留めていたという独逸語専修学校については、学校の内容も彼の在学状況も知られていなかった。[2]そも

そも、直接在籍を証明する資料すら見つかっていなかったのだ。

先年、その調査を思い立ち、目白の獨協学園と草加の獨協大学を訪れ、関連する資料を閲覧することが出来た。魯迅の在籍を証明する学籍簿等はなかった。しかし、独逸学協会学校やその附設たる独逸語専修学校を知る資料はかなり沢山あった。さらに、官費留学生魯迅の在籍を裏づける資料を、ほかで見つけ出した。これらの資料が整った時、実は、「魯迅と獨逸語専修学校—獨逸学協会学校とその周辺」という論文が発表された。[3] 一読、独逸学協会学校関係の資料によって書かれたものだと分った。教えられるところは多々あったのだが、同じ資料でも、読みによって導き出されるものは異るものだと感じた。そこで、整えた資料を基にして、独逸語専修学校とはどのような学校なのか、「文芸運動」を志した魯迅にその教育は何をもたらしたのか、について、敢えて私見を述べてみることにした。

一

まず、魯迅が独逸語専修学校に在籍したことが何によって裏づけられるか、という、立論の基本に関わる問題から始めよう。

魯迅自身は、ドイツ語学校のことは何も書き残してはいない。たゞ、こんな回想があるだけだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

…私はそこで（仙台医専の…筆者注）学籍を棄て、再び東京へ出た。数人の友人とささやかな計画を立てたが、どれも次々に失敗した。私はそこでドイツへ行こうと考えたが、これも失敗した。[4]

魯迅がドイツ語学校に通っていたことを明らかにしているのは、その時期東京で魯迅と共同生活をしていた二人、弟の周作人と友人の許壽裳である。彼らの回想の他にも、このことについて言及した伝記・年譜・回想等はあるが、ほとんど出拠はこの二人の回想である。要するにそれらは、二次的資料なのである。

周作人の回想―

予才が医学校で学んだのはドイツ語だった。だから、後になって専らドイツ語を学ぶことになり、東京の独逸語学協会の学校で授業を受けた。[5]

魯迅の東京での日常生活は、言うなれば幾分変っていた。というのは、留学だから学籍は独逸語学会の独逸語学校にあったが、実際にはそこの学生になっていたのではなく、一生の文学の仕事の準備をしていたのであるから。[6]

彼はもう正式の学校へは入らぬことにして、たゞ一生懸命外国語の勉強をした。ある時期「独逸語学協会」が設けたドイツ語学校へ授業を受けに行ってはいたが、普段はたいてい自学し、ドイツ語の新刊旧刊の本や雑誌を買い集めて、下宿で辞書をたよりに自分で読んでいた。

…略…

退学後東京で暮したこの数年、表面的にはほとんど閑居であった。正式の学校へもゆかず、たゞ「独逸語学協会」附設の学校に籍を置き、好きな時に出かけて授業を受けたが、普段は古本屋めぐりばかりして、ドイツ語の本を買って来ては自分で読んでいた。[7]

魯迅は、終始、独逸語学協会附設の学校に籍を置き、ドイツ語を学ぶだけであったから、当然、自分の時間はもっと多くなった。[8]

許壽裳の回想―

一九〇六年春―九年春　東京で文学を研究し、あわせてドイツ語とロシヤ語を学ぶ。[9]

魯迅が東京で文芸を研究していた時には、あわせて、章太炎先生について文字学を学び、ロシヤの

革命党についてロシヤ語を学び、又、外国語学校でドイツ語を学んだ。私はどれも彼と一緒であった。[10]

一九〇八年春、私は東京高師を終えた。一方では、国文の力をつけるため従前通り章先生のところで学び、一方では、ドイツ語の学習を続けヨーロッパ留学の準備をするつもりだった。

…略…

私は魯迅と一緒に暮していただけではなく、いつも行動を共にしていた。章先生のところへ一緒に講義を受けにゆくとか、一緒にドイツ語の勉強にゆくとか、—その時はロシヤ語を学ぶことはもうやめてしまっていた。[11]

二人の回想から分ることは、魯迅の通っていた学校は、「独逸語学協会」或いは「独逸語学会」に設けられた「独逸語学校」であったこと、その学校には勤勉に通っていたというのではないらしいこと、又、許壽裳と一緒に通っていたこと、魯迅は学校以外に自分でもドイツ語の書物をいろいろ読んでいたこと、魯迅も許壽裳もドイツへ留学したいと思っていたこと、である。

周作人が記しているこの「独逸語学校」は何なのか。当時東京にあったドイツ語学校を捜せば、これに近いものとして、独逸学協会学校に設けられた独逸語専修学校の名が浮び上ってくる。しかし、現在、魯迅の在籍を証明する学籍簿等は、見当らない。だから、状況としては独逸語専修学校に在籍した可能

性が極めて高い、としか言えぬであろう。

ところがここに当時の二つの記録がある。一つは、日本の外務省が調べた、清国留学生の在籍校・在籍数等の表、一つは、清国の両江学務處の公文書に見える、日本派遣南洋官費留学生に対する官費支給の「豫算表」である。魯迅は一九〇二年四月南洋官費留学生として来日した。

「清國留學生異動調（自四十年七月至十二月）」

學校名	入學者	轉學者	退學者	卒業者	現在數
獨逸語專修學校	七	—	二	—	五
獨逸學協會學校中學	一	—	—	—	一

（外務省外交文書）[12]

「豫算表」

姓名	學校	學費	摘要
周樹人	德語學校	四百元	私立學校
官成琨	獨逸語言學校		該生係陸師學堂教習以薪水非學費故無定數
鍾光琳	仝上		仝上

（『江甯學務雜誌』第一冊　丁未年）[13]

これらは、偶々同じ一九〇七年に、日本と清国で公に記録されていたものである。魯迅とドイツ語学校に関連する部分を抄録して示した。

さらに、近年公刊された年譜に次のような記載がある。

一九〇六年四月

多分本月、雑誌『新生』の準備を始め、一方、ドイツ語学校（原文　德語学校—引用者注）（校名は一九〇七年四月出版の、四月期『官報』四八頁による—原注）に籍を置き、時々一・二科目を聴きにゆき、…[14]

在学校名（德語学校）が、前出の『江甯學務雜誌』記載の文字と同じであること、それが留学生監督處『官報』の記載によるものであることに注意しなければならない。『江甯學務雜誌』の記載もこの『官報』に基づいたものと思われるのである。「豫算表」と年譜の依拠する『官報』の記載は、魯迅が、官費留学生としての身分をドイツ語学校に置いていたことの動かぬ証左である。

一方、「清國留學生異動調」には、この二校以外にドイツ語学校の名は記されていない。だから、この時ドイツ語学校に学籍を置いた留学生は、この二つの学校の何れかにいたことになる。幸いにして、現存する当時の学籍簿と『獨逸學協會學校中學一覧』によって、中学に一名だけ在籍していた留学生の

氏名を確認することが出来た。[15] その名は周宏平、湖南省長沙出身で、一九〇五年から九年まで在学した。従って、「豫算表」に名を記す三名は、学校名の記載は、「德語學校」「獨逸語言學校」の二種になってはいるが、いずれも「獨逸語專修學校」に在籍していたと考えられる。

都立公文書館所蔵の公文書によれば、明治三十二（98）年現在、在京の私立のドイツ語学校として、独逸学協会学校・同中学・独逸学館があった。その後、明治三十四（01）年に独逸学協会学校別科・同校独逸語専修科・正則独逸語講習会、翌三十五（02）年に帝国独逸学会独逸語専門学校・帝国独逸学会正則独逸語学校の、設置が認可されている。このうち、独逸学協会学校独逸語専修科は、認可後まもなく、独逸語専修学校に改称し校名の変更届を出しているのである。[16] これが、「清國留學生異動調」に記載される学校である。

一九〇七年の時点で、魯迅が独逸学協会学校が設けた独逸語専修学校に官費留学生として在籍していたことは、以上によって確認出来た。さらに、前出の年譜により、『官報』の記載に照らして、魯迅の官費留学生としての身分は、一九〇九年八月まで続いていたことが分る。[17] 一九〇六年上京直後の魯迅の資格を記録したものの有無は定かではないが、しかし、魯迅が当初から官費生として留学していることを考えれば、仙台医学専門学校退学後、[18] その資格を維持する為、時をおかずに独逸語専修学校に入ったと考えられる。

独逸語専修学校の清国留学生五名のうち、官・鍾の二名は、陸師学堂の教師である。記載誌から推せ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com